

新編水滸

子
六編
七

~21
875
57



21
175
卷 57

新編水滸畫傳卷之五拾七

東武 高井蘭山翁

譯編

明治三十二年
十一月十日
購求



○東平府小誤て九紋龍と陷

らんとしてれた。流皆心腹せざるべ。此上の天玄子事と定人と云らる
ゆ。兵用問て云。宋君何等の高見有や。彼くは是と兼人と申す。我ハ
宋江が云。今山陣に錢糧乏し。こに困て天玄と假の乃現と思ひ出。ぬ
梁山泊の東小三所の州府あり。此も不の系。東沙糧多し。不の東平
府又一不の東昌府。我軍未と彼所と闘さ。喜ひ。此度と不の府。不
兵糧を借べられ。彼所をせざる。必結を。今我盧員外と闘と
拵て。各一方に弛向い。先に城と破り。人者。梁山泊の陣を。と倣べし。

新編水滸畫傳卷之五拾七

京江
中
孫新

是則天乞に但さる知あり。兵用が云是私を公論あり。いよくあれ
事とゆひ天乞に但せり。盧俊義是と聞て比上小醜と云々。宋
何より再三誘くもや。某子終て宋恩の号令とて。あつべけれとて。
さうに於承せざうしう。いんを晁天王の送令。宋小あつべけれとて。
に命じられ。遂ふ二ツの圍と書合手出さう。盧俊義止とて。宋
共に香と燈て天地を祈り。各一ツの圍と拵り。知み宋の宋平府拵
著る。盧俊義の宋昌府に拵り著る。いんを晁天王の送令。宋小あつべけれとて。
腹さう。宋の宋昌府に拵り著る。いんを晁天王の送令。宋小あつべけれとて。
林冲、花榮、劉唐、史進、徐寧、燕順、呂方、郭盛、韓滔、彭玘、孔明、孔亮、
解珍、解寶、王矮虎、一丈青、孫二娘、孫新、顧大嫂、石勇、郁保四、王定六、段
系、段二、二十五人。いんを晁天王の送令。宋小あつべけれとて。
系、段二、二十五人。いんを晁天王の送令。宋小あつべけれとて。

留
中
孫新

阮小五、阮小七、二人を。盧俊義にお返し大なる。兵用、公孫勝、関勝、
呼延灼、朱仝、雷横、索超、楊志、單廷珪、魏定、國宣、贊、郝思文、燕青、
楊林、歐鵬、凌振、馬麟、鄧飛、段、恩、樊瑞、頂立、李哀、時迁、白勝等二十
みんを。いんを晁天王の送令。宋小あつべけれとて。
三人を。いんを晁天王の送令。宋小あつべけれとて。
魯春、張横、張、揚、准、石秀、朱武、黃、孫、新、蕭、張、張、宣、張、張、
大、張、孟、康、候、健、陣、達、揚、春、鄭、天、壽、薛、永、周、通、湯、隆、李、忠、曹、正、宋、五、杜、
興、鄒、淵、鄒、潤、朱、富、朱、半、孫、福、孫、孝、李、立、李、立、李、立、焦、挺、張、張、杜、廷、
殺、宋、の、山、陣、を、いんを晁天王の送令。宋小あつべけれとて。
下り。いんを晁天王の送令。宋小あつべけれとて。
癸卯、此、時、三、月、の、卯、の、日、あ、つ、べ、けれ、と、い、ふ、日、暖、い、風、和、ら、し、く、て、人、る、の、働、も、易、ら、し、

新編水滸畫傳卷之五十二

竹編久年書傳卷之五十二

董平
郁保四
王定六を
策



宋江
盧俊義

宋江盧俊義
天を祀り廟を拈



あゝ人。董平其言に曰く。則ち人の使者と辨る痛く二十枚策道
小軍士小令。城外へ追拂ひし。人の中陣へ歸りて宋に小見へ
董平己が勇小傲て。山陣の人をを慢り。我輩と云二十枚策蓋り。我
彼らせし。始終具小終り。宋に因もあへど忿然として其怒り。
家一先礼と以り書簡と寄し。処に彼らんと使者と打て。其礼と
行ふや。我遂に此城と破て。寛と吾人ものごと。郁保王定ふと先
山陣小送つ。棒撥と卷せあさ。あさ。は時九枚策史進。其初て
宋昔日は東平府小在。一人の妓女と恩愛と交へる。其妓女が
名は李瑞蘭と申。尚は東平府に住り。宋此度多く金銀と持て城
内に忍び入。則ち李瑞蘭が家に逼る。宋其城と攻て董平と我ひ
る。其時宋はひそかに鼓樓の上つ。火と放ち。裡應外合の計にふあて

大功と立べ。あゝ。宋其の意わらん。宋に此計と因り可こと
は。多く金銀と以り史進小あへられ。史と金銀と多く。情に軍告
と告。は日宋に小辯。速に城内小忍入。遂に西原子の李瑞蘭が
家に忍り。其の老母史進を見。大に怒り。其女も李瑞蘭小遇し。あ
後樓小誘引を。抑は李瑞蘭。尚世有名の妓女あり。其程の風流令
くして。百般の遊藝を見。その容儀を。美麗として。梨丸を告
玉香と生む。光景たり。されば時の人を。其のあつらん。李瑞
蘭史進小同て云。忍に梁山泊とや。人云。宋の居候。宋に
云人に。隨順し。あひ共。山陣の所。あ。あ。果て諺に
あ。あ。此。又城中。宋に人を。引て。當地と焼掛
と云。風。夜耳。す。更に安ん。宋に

夫せん 万千の心と誑て陥坑不居し大悪業の活をありて何ぞ一人の
 命を痛せんや汝が死すべし我自ら馳て東平府に汝は月夜に由
 とすべし其時後悔しなすことありれ本公が云汝先焦燥べし汝は宜
 く彼に陪侍して酒と飲めよ若くは打て蛇と終るべしむらぐでん
 彼必を逃去べきを我れ先馳て下官らに傳へし後又東平府に汝
 べしとて遂に門外に砲あたり叔史をいふ本公が面を白くして
 と見てん中に畧怪を問問て云汝が面を甚く驚らば何ぞの事なり
 云く我今樓と上りさぬふ
 様子の上あり候き己に居んとしつるゆへ心かち候て大に驚し小儀て
 面色後あるはとと平生の辨舌と持て誑さるるに得の史を言及
 も疑はざるあり候なり此時本公が語訃て別離の情を叙約莫一時けり

ことゝぬる処に數十人の下官一度に咄と樓上に砲上り史進が油断
 小倉として小枕は執遂に索と掛りつる史進の手をぬけて白くと
 御らば牙と咬で怒りつるも其益更にあらざるなり下官ども
 史を引て東平府にありしを本公が罵て云汝淫賊のうんとぞ
 斯大膽に只城中に居りて細作となくや本公が語系が父これと
 弘すば申し此大事を做出すべし汝はく実情を白状せよ若くは
 痛く拷問を行ふべし史進これと聞て心中に嘆し唯黙然として
 言はざるなり本公が云汝も賊打せんばさるべし汝はく実情を
 白打されば史を尋て白状せざるなり董平が云先是と牢中に
 に入置後日宋のと捉へし人此一処に皆東京へ引すべし連逐ふ

死囚牢の内ふきぬ。叔常江の史進が出くる跡より。書と洋り
 修へて。呉用の算うらむ。呉用大に怒りて。比事と盧俊義が吉連夜ふ
 宋江の陣ふわり。向うの史進の誰が知と清く。城中に入らる。宋江
 云々。云史進が昔日思ふ深うらむ。本平府小在
 云々。裡裏外合の計とあさん。自ら死に地行ぬ。呉用が
 系あありあり。あ史進とまらにほく。と今更後悔美千あり
 凡妓女表子のたれ新し。と迎へ旧と送り。許多の人とまらぬ
 陷牢ふ墮し。信実の情ある者牢あり。望む。一の思電ありと云々
 老母が子と出ぐ。史進は度必定猶と被る。宋江は言と聞て
 忽ち大不慌て。再三計と呉用ふ求む。此時呉用顧大嫂と呼ん。この
 汝今貧女の形ふ出ま。城中の忍び入。唯を合とあして。史進が消息と

窺へ。あ好と音耗あ。ば子速死回く。告多人。彼史を。一敵の擒と成る。
 牢中にある。汝史進に飯を送る。解ふ。牢門と守る。士卒と
 彼と。則牢中に入。史進ふ遇ひ。今月明日の黄昏に。我三軍と記
 て。城と攻む。其内何牢中。と脱出べ。計とあして。昨日の夜
 釈方の。城内ふ火と放て。と終る。あ史進と脱れ。城
 中に火と放む。大功立。処ふ成ぬ。叔又顧大嫂と城中。忍び入。せ
 計。宋江と引。汶上縣と攻む。彼処の百姓。我人。あ
 必。東兵府ふ。逃べ。間顧大嫂。此内に。終。て。城中に
 入。然。ば。え。充る者。あ。は。て。一。計。と。授。て。呉。用。の。再。び。東
 昌府の陣へぞ。ゆ。り。宋江。の。解。監。解。室。ふ。百。の。兵。と。あ。へ。汶。上
 縣。と。攻。ま。せ。る。ふ。彼。前。の。百。姓。が。果。して。大。小。怕。れ。老。と。扶。け。初。と。抱

新編水滸傳卷之五十七

そく皆東平府へ逃来る。此時顧大嫂の髪と鬢髻衣と襤褸。百姓らが内に打雑て。城内小路入街に徘徊して乞食となし。這廂那廂あり、史とが消息と窺ひつらんに、史とをハチヤ大府に投つて牢中に在りしと聞しつべ。兵用が者亮凡人の及ぶ所ああり、げと感づり

○宋公明義とりつて双陰将を獄

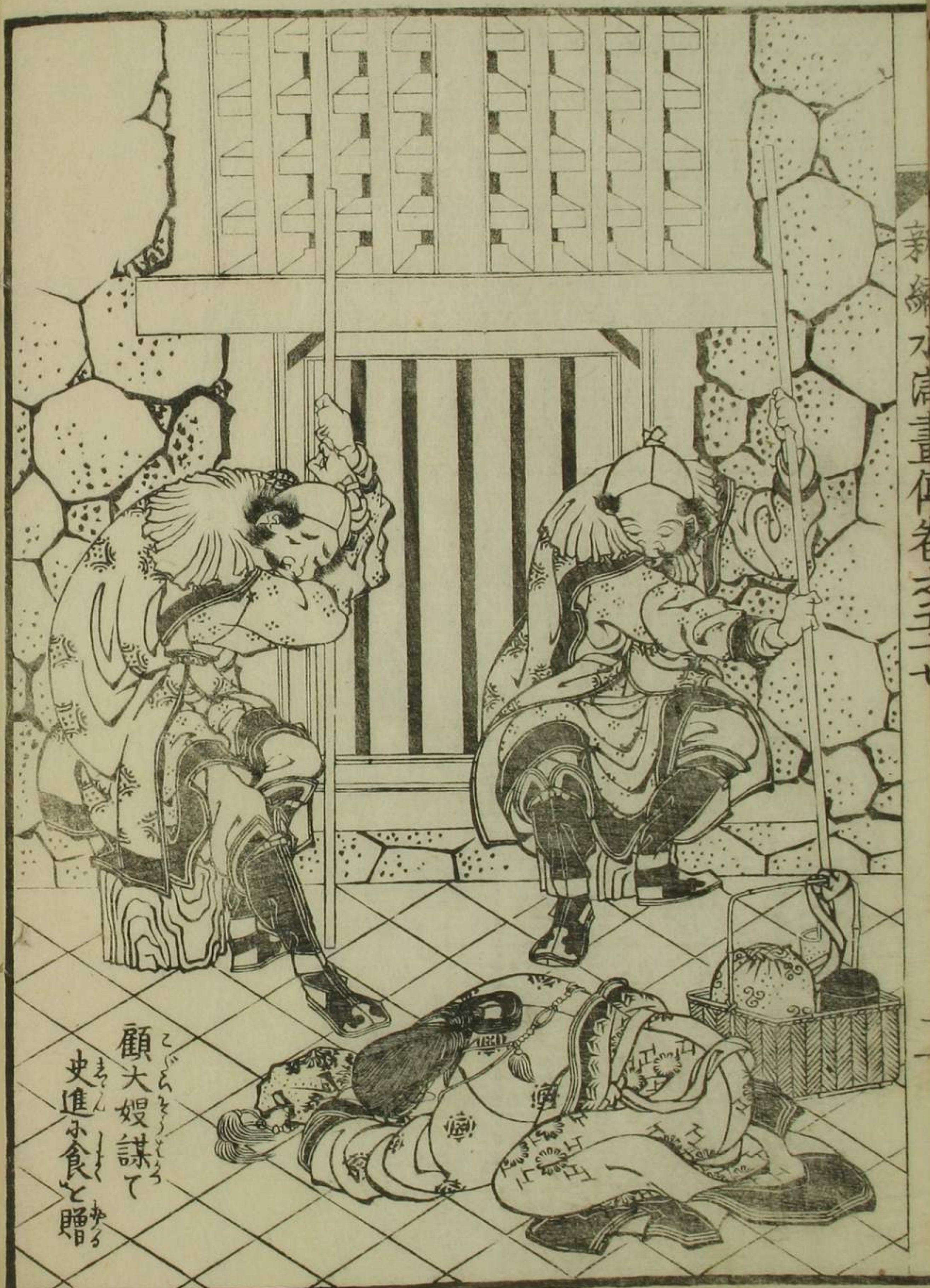
翌日顧大嫂及び推方へ。牢門の辺りへ引りし処、一人の下女出たりしつべ。顧大嫂地よに伏して、只顧流涕する。彼下女問て云、貧女何ぞ人を流すや。顧大嫂懇懇に告ぐ。云、今牢中に入てより、史進と云人の原我を人少く、強うして、罪の次第にあらざれども

史進、前日街と引りしつべ、入牢去らるるを、我中途より跟随せられ、見れば、強り哀れに思ふ、史進、只一飯と送りんと欲し、敢て此牢まで、引いぬ、強り官人一點の仁義と、命をまひて、史進に肉と遇し、史進、下官けきと聞て、云々つべ。史進、これ梁山泊の強盗と云、強盗は、皮肉に忍び入る。牢中のせうと、焼殺さんと告りしつべ。大罪人、推つあへ、汝と引て遇し、史進、速ふ此処と立去る人。顧大嫂、猶後と酒で云、彼人けのあま、大罪と犯さん、史進、此れもあま、つべ。宿業、ふ困り、強りつらるるを、此上、あも我宜しく、保く、寛あ、死と送りせ、又、一飯と送りしつべ。旧日の情を、思ひ、只、憐愍と、送し、まひて、史進、是と送りしつべ。史進、地、領中、伏て、哭らるる。下女、是と聞て、勢、あま、男子、あ、史進、て、作ら、れ



九文龍下官等
酒肉をあそぶ
宰と破

丁酉八月廿二日



顧大嫂謀て
史進小食と贈

新編水滸石傳卷之三十一

金銀米錢悉く奪ひ。若千の車に裝載して是を梁山泊に運せり。史進の兵を引ておのれ家にお親子三人并に侍の眷属一く是れと破りて一時の怒を報じり。宋に又程太守が家法と府前ふ運び出させ。是のめや百姓より割取。財あるに再び百姓を運んとて公におつて百姓らの怒を起し。処ふ白眉白勝を執りてくる。盧員外東昌府の合戦小容易と打破られ親方の兵多く亡び畢ぬ。彼一人の猛將あり。姓は張名は清と号し。原彰徳府の人あり。之を能石と云せんと打ひ。百くび奪つて百く中。是故不詳名と没羽箭とや。あはれ又あ人の副將あり。一人が名は花頂虎龔旺と号して。馬上より飛槍を花し。又一人が名は中葉虎丁得孫と号して。馬上より飛劍と花し。前日の戦に

郝思文と張清と槍を合せ。張清遂小進。郝思文是と追蒐る。処ふ張清を花せ。郝思文と馬より下に打落せり。燕青此の張清を討つ。郝思文が一命を救ひぬ。此日一陣と破ら。翌日又混世魔王樊瑞頂元本を哀と人と引て。我に丁得孫劍と花せ。頂元本中よりが槍をひ。小疵はく。びして一命と脱せぬ。といへども。日ま。一陣と破り。あ。是ゆ。軍師を馳て救ひと。おあ。おあ。おあ。中。宋。黒。速。小。三。軍。と。移。して。我。いと。助け。へ。宋。に。同。む。あ。ん。ど。大。の。歎。息。して。云。盧。員。外。何。ぞ。お。の。れ。縁。あ。る。や。我。の。偏。に。盧。員。外。の。先。救。と。破。り。し。め。ん。と。致。し。兵。用。公。孫。勝。は。は。は。遣。し。く。つ。れ。却。て。我。の。小。利。あ。る。と。成。小。是。と。恨。べ。し。は。上。の。我。の。一。切。も。早。く。盧。員。外。と。助。く。べ。し。法。ね。と。知。く。用。意。と。伺。



没羽箭礮
飛して大
山陣の諸将
戦



春中三景
病床の画

竹編水滸書傳卷之五十七

云々つゝ破れ石と花の神をあれ。一人と云て欲せん。不可。我雷
 横と共の力と候せ。左右より夾で撃バ。争う勝と云。人々も
 二騎響と云。衝出。已に陣前に出り。張清あまを又て咭く
 と打笑ひ。汝洛城ら一人の勝負叶。又一人と云。多々や。縦十騎
 二十騎一連に。何らの大車。做あえんと。石と拵て待。武
 処。雷横先刀と。近づく。張清あまの石と花。又雷
 横と打伏。関勝あまを見て牙。被。雷刀と。痛。泡
 朱全雷横と。張清と討んとせ。張清又石と投。れバ。
 関勝もやくも青竜刀と。拵。拵ひ。刀の。双。中。火
 出。電光の。了。得。関勝も稀有の。思ひ。再。張す。
 陣中。退。時。年。陣中。始。張と。一。張。

心中に思ふ。我今。新。今。未。寸。功。建。此。武
 張。何。軍。功。建。光。彩。と。せ。ん。や。と。双
 張。と。拵。張。見。大。罵。董。平。我
 と。汝。原。來。陣。團。の。好。あ。ね。共。小。力。と。候。せ。賊。と。亡。び。ん。を
 理。の。當。然。あ。れ。何。人。朝。廷。に。背。て。城。小。隊。り。ぬ。や。汝。は。是。と。耻。す
 して。我。と。戦。ん。と。す。木。竹。も。如。ぶ。董。平。は。言。を。聞。て。大。小
 怒。り。双。槍。と。拵。張。清。小。棚。か。り。大。軍。を。又。張。己。に。十。余。合。の
 張。清。又。石。と。拵。て。花。せ。る。董。平。あ。ま。を。遊。て。汝。油。が
 花。不。他。人。あ。り。中。も。我。少。よ。中。ら。汝。小。我。手。候。と。ん。せ。んと。急
 の。双。槍。と。拵。て。拵。入。張。清。を。回。して。走。身。二。の。石。と
 拵。て。花。せ。る。董。平。又。是。と。拵。ひ。れ。バ。張。清。二。の。石。中。ら。ぶ。と。こ。

大に慌てると飛せし門の辺に退きし処に董平背後より諒と
 取伸棚しつぱ張清これと遊し再び鏑と交へる秘術を尽しと
 お我ひ精糸益盛ん之宋江が陣中より索超を揮て馳せり
 此張清が陣中より龔旺丁徳孫一同に砲を垂れ索超と迎へて
 お我ふ林冲花榮呂方郭盛等のに大ねお矯く突おれれば張清
 敵がや思ひけん本陣とぞいで走り董平勢ひにぞあぐ
 追風し処に張清又石を飛せし董平敢て長追せば追に中
 候に引回ひ索超を足と見せ龔旺丁得孫と拵て張清小破て蒐
 又石を飛せ索超が面上を打破り血迸り流れて紅の染しつぱ索超大
 に痛し這く斧と捉逃回る樹林冲花榮の龍巻胆と戦ひ呂方郭盛の
 丁得孫と戦ひ暫し勝負ハあせざりされば龔旺もや飛陰とぞと

方に作天し見し林冲花榮も去人小し投せり丁得孫も亦此剣を
 用ひられども中るはどきと思ひ只魂とみく死戦とあり浪を越せハ
 陣門の下に立ち暗に走ひけん張清石とみく打惚し十六人の
 大ね急くおれし我今弓勢を現さずんば何のめり侍んとぞ
 弓勢打擡へ放擡て漂ど致ちりるれを業丁得孫がるの足り
 中りしうばるる飛騰て丁得孫と落しりる処に呂方郭盛並ち是
 と活投る張清を救はんとしりるれを小とみて大に驚し加とく
 只劉唐と仰めて東昌府小引入り太守ハ城の樓の上にて張清が
 始終の働を見る中に感収斜あはば副将去人と捉りれりといへ
 大劉唐一人を捉へ大ね急く打倒し打落しりるをみて今日
 軍の親方の勝と評論し是劉唐に頸枷と掛て牢中に入せり

張清が畢竟のつうん次巻とんむる洋あり

はげ水滸傳百回本の六十八回小字に盧俊義小従ふは頼天

み員水軍の隊三員づとらててて姓名ははせふ出るに終りて

そひと美とぶ字の二十員盧俊義の二十四員三員づと

姓名の教訓語ある作者の杜撰あり又先板通俗忠義水滸傳

ちあぢまが宅東平府の西九子と書し西九子の誤あり九と瓦と

似るふ誤りしとてふり又はせふ小頼大嫂火をたつべき深差ひ

空しく城内に本をすとのそふと字の打今も何の十の

あく三消せがや

新編水滸畫傳卷之五十七

